



主催事業 若手教員道徳授業研修会 R5.11.1

11月1日(水) 主催事業 若手教員道徳授業研修会を開催し、教職4年目の立山中央小学校6年担任大浦匠教諭に授業提案をしていただきました。主題名「よりよい学校のために」教材名「だれが拾うの?」で、学校のために自分ができることをしていこうとする実践意欲を育てるというねらいで授業が展開されました。教材の中で登場する、校庭に落ちているボールを6年生が拾い、お手本を示すことが大切だと主張する植山さんと、6年生が拾っては卒業したら拾う人がいない元通りの状態になり、いい学校にならないので拾うことに反対する木島さんの気持ちを考える子供たち。4月からの最高学年としての自分たちの活動場面と重ね合わせながら発言し、話し合いを進めました。授業の後半で「いい学校にするためにはどんなことを大切にすればよいでしょう」という大浦先生の発問に対して、「自分から積極的に取り組む」「一人ではなくみんなで力を合わせながら取り組む」など、これまでの自分を振り返りながら、さらに向上していきたいという子供たちの願いが発表されました。事後研では釜ヶ淵小学校松田校長先生から「日頃から子供の思いや考えを捉えるように努めること」「導入では方向付けを明確に行うこと」「自分の生活と結びつける発問を工夫すること」について指導助言がありました。また、高野小学校高野校長先生から「授業記録を確実に取ることの大切さ」「今後、自分らしい授業づくりに取り組むことへの期待」が伝えられました。有意義な研修会になりました。

生徒の言葉を使い繋げていくこと、生徒同士の関わりが重要であることを再確認できた。「悩み相談」で同様の件について悩み事として相談していたが、自分自身の授業でも、生徒主体とする授業づくりを目指していきたいと感じた。そのための授業展開、発問の仕方、振り返りを見越した導入や指名など、自分の課題に向き合っていきたい。道徳の授業こそ、教師自身が、生徒とお互いに「人」として関わる時間だと感じている。生徒の心に少しでも残る授業を考え続けていきたい。
(中学校教諭)

